西伊豆まちづくりプロジェクト

上田　信

伊豆半島、駿河湾に面する西伊豆町では、「まちづくり協議会」という住民主体の地域おこしの試みが進められている。筆者は人の縁から、この協議会につながりを持つようになった。西伊豆町では「お接待」「おすそわけ」という言葉に象徴される、金銭を媒介としないモノやサービスの交換が自然になされている。「地元の方々へのお返しを」という気持ちから、筆者は地域と「若者」「よそ者」とをつなぐ取り組みをはじめている。

はじめに

伊豆半島の西海岸、駿河湾に面した西伊豆町で、ESDへの模索が進んでいます。かつてこの町は、仁科（堂ヶ島）における観光、田子や安良里を拠点とする遠洋漁業、宇久須における硅石（ガラスの原料）採掘、大沢里の林業など、多様な産業で賑わっていました。しかし、現在では長期に滞在する観光客の減少、高齢化にともなう林業・漁業の衰退、硅石鉱山の閉鎖などに直面しています。

こうした状況に対して、菅原由美子さん（菅原由美子観光計画研究所主宰）のアドバイスを得て、ハコモノではなく住民が主体となる「まちづくり」の動きが始まりました。筆者は、宇久須まちづくり協議会スローライフ部会メンバーの１人と面識を持ったことが契機となり、この土地でのまちづくりに５年前から関わりを続けています。

西伊豆町まちづくり協議会の活動

西伊豆町では現在、役場の支援を受けた「西伊豆町まちづくり協議会」が、地元住民が主体となった地域の活性化に取り組んでいます。昨年3月に行われた協議会の成果報告会の席上、アドバイザーの菅原さんが示したヴィジョンが、印象的でした。実際の言葉づかいは忘れてしまいましたが、その要点はこのようになります。

> 日本の各地で観光パンフレットが作られているが、使われている写真のほとんどは、山や海などの美しい自然。西伊豆町でこれから作られるパンフレットは、地元の住民の自然な笑顔が表紙に掲げられるものであってほしい。

西伊豆町は「日本一、夕陽のきれいな町」として観光客を集めようとしています。確かに駿河湾に沈む夕陽は、魅力的です。しかし、地域のほんとうの魅力は、そこに住んでいる人であり、その生き方だ、というのです。そのメッセージを、観光パンフレットという目に見えるヴィジュアルなイメージとして、提示しています。

まちづくり協議会は、仁科・田子・安良里・宇久須という地区で、それぞれ個性的な取り組みを展開しています。市街地が広がる仁科では、地域に密着していた元・山田医院の建物を地域住民が借りて、コミュニティースペース「よってって山田さん」(写真①)を、金・土曜日に開いています。医院の風格はそのまま残し、町歩きの成果を展示したり、地場の野菜やジャムなどを販売したりと、活用されています。遠洋カツオ漁の基地であった田子では、カツオ船の模型を作製し、遠洋漁業の語り部が漁民の心意気を来訪者に伝えるという活動を行っています。清水にある東海大学海洋学部の関いずみ先生（ESD研究所客員研究員）の指導を受ける学生は、熱心にその話を聞いていました。安良里では砂浜に炭を入れるなどの方法で、アサリの再生（写真②）に取り組み、宇久須では無煙炭化器（写真③）を用いた簡便な方法で炭を焼き、休耕田に鋤き込んで、耕地の再生を進めています。高齢化が進む山間の大沢里地区では、活動が停滞しています。しかし、廃校となった分校の校舎を利用した町営宿泊施設やまびこ荘を拠点に、まちづくりの可能性を秘めています。

①よってって山田さん(仁科まちづくり協議会)

つながる・つなげる

まちづくり協議会に興味を持ち、筆者は数年前から西伊豆町に通い始めました。訪問したときに、しばしば地元の方から受けた言葉があります。それは、「お接待」と「おすそわけ」。好意を受けたときに、何かお返しできたらという表情をすると、「これは、お接待ですから」、「おすそわけですから」と言われてしまいます。何か持っているものを「おすそわけ」しなければ、と頭を絞って棚卸したときに思いついたのが、研究者として活動をするなかで培った人の輪でした。

山・海・里にひろがる豊かな自然、お祭・歴史に彩られた奥行きのある文化、そして相互扶助が今も生きる社会、そのすべてがそこにある西伊豆町に自分自身が「つながり」、知り合いを「つなげる」。活動の理念は、「おすそわけ」。

それぞれの人が持つモノ・ワザ・チエを、貨幣を媒介とせずに直接に交換しあうことです。

昨年はオリンピック招致のプレゼンテーションで用いられた「オモテナシ」という言葉が、英語やフランス語には翻訳できない日本の心を示すメッセージとして、注目されました。おなじように国連用語となった日本語に、「satoyama」があります。これに続く国際的な言葉として「osusowake」を、一個の屹立した思想にまで磨き上げていきたいと考えています。

2013年の活動振り返り

地域の活性化に大きな役割を果たすのは、「馬鹿者」「若者」「よそ者」だと、よくいわれます。「馬鹿者」とは地域のなかにある固定したものの考え方にこだわらず、新たな試みをはじめようとする人々、「若者」とは地域の動きに活力を与え、未来への展望を拓こうとする人々、そして「よそ者」とは地域の外から地元の人が見落としがちな地域の魅力を発見したり、新たな考え方をもたらしてくれたりする人々、ということになるでしょう。

2013年の西伊豆町での活動を振り返ってみると、偶然も重なり、結果として「若者」「よそ者」と地元とが「つながる」という可能性が見えてきた、ということになるでしょう。

活動の拠点として、筆者が属しているNPO緑の地球ネットワーク（GEN）関東ブランチが寄付を募り、東海工業伊豆事業所から宿舎を5月連休期間開始期から11月連休期間終了時までの10ヶ月＋数日のあいだ借りることができました。5月と11月にはNPOメンバーが、9月には立教大学の上田ゼミの学生が、この宿舎を合宿の場としました。

関東ブランチ5月合宿では大雨にたたられましたが、なんとか再生休耕田での作付けを半分程度、行うことができました。9月の上田ゼミ合宿では、再生休耕田のカボチャに、『里山資本主義』（藻谷浩介・NHK広島取材班、角川oneテーマ21新書）で紹介されている事例を参考にして、釘で「ありがとう」「謝謝（シェシェ）」「감사 합니다（カムサ ハムニダ）」などのメッセージを記しました。関東ブランチ11月合宿は、再生休耕田でサトイモ・サツマイモの収穫。収穫物は合宿参加者や活動に協力していただいている方々に「おすそわけ」しました。

5月合宿の企画として、5月11日（土）に役場宇久須支所にて講演会「地元学からの出発」を開催、①上田信「地元学について」、②橋谷勇治（NPOバイオマス産業ネットワーク会員）「山林活用と地域振興」、③長尾勤（株式会社ベック社長）「ヤーコン6次産業化栽培から販売収入は可能か」という内容で、「よそ者」として地域外の知見を紹介する試みを行いました。

9月の上田ゼミ合宿では、大沢里のやまびこ荘にて地元の代表者に集まってもらい、学生との懇談会を行いました。大沢里の魅力と課題などについて学生に語ってもらい、学生からは発見したことを紹介してもらいました。

7月17日夜から18日朝にかけて、ゲリラ豪雨に西伊豆町が襲われました。特に田子・安良里での被害が大きく、河川があふれ土砂が民家に流入しました。その復旧のために、いち早く動いたのが国際ボランティア学生協会（IVUSA）です。2010年にIVUSAの関係者が西伊豆町に来訪していたという縁から、被害の報道があった直後に、復旧に向けたボランティア活動のため学生が来ることとなりました。

②アサリ再生（安良里まちづくり協議会）

③無煙炭化器（宇久須まちづくり協議会）

2014年2月20～22日には、7月のボランティア活動のなかで生まれた西伊豆町とIVUSAつながりが発展し、黄金崎の松林再生ボランティア活動が実施されることとなっています。この活動には、GEN顧問の小川眞氏（菌類学者で菌根菌を用いた松林再生の指導を行う）、桜井尚武氏（林学者）なども参加する予定。この活動は「若者」「よそ者」が地域と係わる具体的な成果となるでしょう。

活動の状況は、ブログ「西伊豆（宇久須）だより」（http://blog.goo.ne.jp/gen-ugusu）に紹介されています。ぜひ一度、訪問してみてください。

（写真はいずれも筆者撮影）

上田信（うえだ・まこと）東京都生まれ。1982年東京大学大学院人文科学研究科（東洋史専攻）修士課程修了。その後、東京大学東洋文化研究所助手、立教大学文学部専任講師を経て同教授。専門は中国社会史・生態環境史など。立教大学アジア地域研究所所長、ESD研究所運営委員。NPO緑の地球ネットワーク世話人。著書には、『森と緑の中国史』（岩波書店）、『トラが語る中国史』（山川出版社）、『風水という名の環境学』（農文協）、『東ユーラシアの生態環境史』（山川出版社）、『大河失調』（岩波書店）など。